

【研究報告要旨】

帰化しても僕は「日本人」になるんじゃないよ

—母親の再婚によって来日した子どもの国籍取得とアイデンティティをめぐって—

藤田美佳

(神奈川大学人間科学部非常勤講師)

タイトルの「帰化しても僕は「日本人」になるんじゃないよ」。これは、日本人男性と再婚した母親によって中国から呼び寄せられた少年 K が、母と共に帰化申請をし、日本国籍を取得した際に発言したものである。発表テーマの設定に当たり、シンポジウムのテーマ「ゆらぐ境界、交わる人びと：「日本人」を再考する」に関わる学校教育現場、地域社会での事例をとって思い起こされたのがこの発言であった。そこで本発表では、K に対するインタビューを踏まえ、「「日本人」を再考する」ことの意義を検討した。

なお、本インタビューでは、アクティブ・インタビュー（ホルスタイン&グブリアム，2004）の手法を活用した。従来のインタビューでは回答者から語られた情報（内容）及びその妥当性、信頼性が重視されてきたが、アクティブ・インタビューは語り手・聞き手による相互行為であり、ナラティブ（物語）の協同制作者であるという社会構築主義的なインタビュー論である。

発表ではまず、対象の少年 K の来日、中学への編入と公的な支援体制、高校及び大学受験、高校・大学生生活の状況を概括した。というのは、K は中国で中学を卒業し、日本で高校進学を希望した外国人生徒である。外国人児童生徒の支援者にとって K のようなケースにどのように対処するのが実践的な課題として存在するため、具体的な支援体制を整理した。また、K は年齢相当学年ではなく、学齢を下げた編入している。学齢を下げた外国人児童生徒のその後の進路や日本語習得の状況、学力形成については研究されていない分野であるため、事例として提示することで今後の研究に結びつけたいと考えた。

その上で、日本国籍取得申請という選択をめぐって、申請時、国籍取得直後の高校一年時、大学入学後、現在の時点で K がどのように国籍取得を意味づけてきたのか、インタビューデータを基に経年での語りの変容について考察した。

そして、インタビューの分析を通じて、聞き手である発表者＝研究者側の視点における課題を指摘した。異文化間教育研究において、「日本人性」を問うこと（2004 年度異文化間教育学会特定課題研究）の意義をまとめた中島智子（2005，pp.6-7）は、「日本人性」を課題とするのは、「日本人性」を定義したり、「日本人」のアイデンティティやエスニシティを考えようというのではなく、「異文化」に関わる教育現象や「異文化」を背景にもつものとしての異文化間教育研究の対象に措定されるとき「異」の捉え方の背後にあるのはどういうことかという問いかけである。それを批判的に検討するには「日本人性」が切り口になるのではないかという提案をしている。そして、「日本人性」の批判研究とは、新たな領域でも新たな対象の発見でもない。異文化間教育研究に潜む無意識な思考様式を意識化し、批判的に介入しようということであると述べている（同，p7）

本発表では、発表者自身のインタビューを批判的に考察することで、研究者がどのように語りを捉えてきたのか、「われわれ」の視点に潜むものを明らかにした。そして「「日本人」を再考する」ことは、対象の実践的な課題を捉えることと同時に、研究のあり方を再考するきっかけになりうることを事例を基に提示した。

ホルスタイン&グブリアム（2004）山田富秋他訳『アクティブ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房

中島智子（2005）「異文化間教育研究と「日本人性」、異文化間教育学会『異文化間教育』22 号、アカデミア出版会